

ころもがわ



「夕日の衣川」は4場合わせて2時間半にわたる大作

衣川区の神楽保存会4団体が共演するころもがわ神楽まつりは2月10日、サンホテル衣川荘で開かれ、350人を超える観客が伝統の舞を堪能しました。

神楽まつりは、昨年亡くなった作家三好京三さんらの呼び掛けで平成3年に開始。今回は三好さんの追悼公演として、創作神楽「夕日の衣川」などが披露されました。

「夕日の衣川」は平安時代末期の衣川が舞台で、三好さんが原作を、旧衣川村で教育長を務めた小坂盛雄さんが台本を担当し、昭和47年に初披露されました。4場構成で、この日は大原・川内・川東・大森の各神楽保存会が1場ずつ出演しました。

故三好京三さんをしのんで
ころもがわ神楽まつりで追悼公演

まちの話題



農村の文化を後世に伝える

「農はだて」で豊作と安全を祈願



昔ながらのかさと衣装が懐かしい庭田植え

第19回全日本農はだての集いは2月9日、胆沢野球場で開催されました。

農はだてとは、農業の始まりの日を意味し、寒さ極まる旧暦の正月11日、農家では荷物を背負う縄や、牛や馬での農作業時に使用する太縄をなつて、その年の農作業の安全と豊作を祈願してきました。

この祭りは、時代とともに失われつつある農耕文化を見直そうと、農業や生活に欠かすことができない「ワラ」と「火」を象徴として始められたものです。観客も参加して全長10mの縄を仕上げる「大縄ない」や、雪面を田んぼに見立ててワラを植える「庭田植え」、日本最大級の大臼でのもちつきなど多彩な催しが行われました。祭りを締めくくると「福俵引き」では、総重量7トンの大俵を250人の厄年連が威勢よく引き寄せ、詰め掛けた約2万人の観客を魅了しました。

みずさわ

南部鉄器の新たな可能性へ 鋳物製ハンドベルを試作



赤銅色のハンドベルが鋳物製

鋳物製ハンドベルの試作品を使ったミニコンサートは2月23日、水沢区のメイプルなどで開かれました。岩手県立大の学生12人が通常作られる銅製ハンドベルと試作品と一緒に使って演奏しました。

鋳物製ハンドベルは、南部鉄器の新たな販路の開拓と技術振興など目的として、平成17年に鋳物生産者らが任意組織で研究に着手。昨年は日本商工会議所の助成を受け、試作品の製作に取り組んできました。

銅製と比べ鋳物製は加工が難しく、音域やデザインなどにも課題が残っています。国内にハンドベル製造メーカーはなく、今後の商品化が期待されています。

子どもが誇りを持てるまち 南都田で家庭教育講演会

胆沢区の南都田教育振興運動実践協議会（千葉裕之会長）主催の家庭教育講演会は2月27日、川崎学院理事長の川崎葉子さんを講師に南都田公民館で開かれました。

講演では、川崎さんが「子どもたちが誇りを持てる地域にしたい」と自ら提案して挑んだ、福島県富岡町のまちおこしについてユーモアを交えて紹介。子どもたちが「この町に生まれて良かった」と思えるようなまちづくりが、地域活性化の第一歩であることを強調しました。参加した約60人は、日ごろの活動の参考しようとする真剣な表情で聴き入っていました。

自身の体験を紹介する川崎さん



いさわ

えさし

古傘をバッグにリサイクル 生活改善グループが研修会



完成したエコバッグを前に

江刺生活改善グループ連絡協議会（菊地静江会長）は2月22日、奥州農業改良普及センターで研修会を開き、使われなくなった傘を再活用するリサイクルエコバッグづくりを学びました。

研修会は同日行われた30回目の総会を記念して企画されました。傘は区内の施設で使われなくなったものを活用。作り方は、傘の布部分を丁寧に骨組みから外し、バッグの柄や袋になる部分をそれぞれ裁断、加工してから縫い合わせます。同会の会計でもある佐藤説子さんが講師を務め、2時間後には色とりどりのリサイクルエコバッグが完成しました。

地区全戸で宝を掘り起こし 白鳥地区で地域資源マップ作成

白鳥地区住民協議会（鈴木正侃会長）が作成していた地域資源マップ「白鳥マップ」がこのほど完成しました。白鳥館遺跡周辺への来訪者に向けた地区の情報発信と、住民自らが地区の素晴らしさを再認識することを目的に、平成18年度から取り組んでいたものです。

マップには、自然や風景、昔からの言い伝えのほか、全世帯で総点検して掘り起こしたものを含め、全92点が白鳥の「宝」として収録されました。両面カラーのA3判で、子どもにも分かりやすいイラスト入り。地区内全世帯に配布したほか、同時に作った拡大版などで地区外へもPRしていく予定です。

地区の宝と夢を載せたマップ



まえさわ